



# さくくら RA



May. 2020

発行/ボーイスカウト世田谷第5団広報部

## 新型コロナウイルスによる緊急事態宣言下で 緊急寄稿特集

### 「考動(こうどう)」すること

団委員長 横山和久

世田谷第5団の皆さん、こんにちは。  
この度4月1日に、団委員長に就任致しました横山です。  
本来であれば、4月5日の入隊・上進式でご挨拶する予定でしたが、今年は新型コロナウイルス感染拡大に伴う活動自粛により、皆さんに直接お話しすることが叶いませんでしたので「さくら」に寄稿させていただきました。

スカウトの皆さんは、3月上旬から臨時休校となり5月になっても未だ学校へ行けない状況が続いていますが、元気にはしていますか？ 仲間と会えない期間が長引いたり、外出自粛等により様々なストレスが溜まり始めている人もいるかと思います。我慢だらけの毎日、「何で自粛しなきゃいけないのかなあ？」と思っている人がいるかもしれませんが、でも皆さんはスカウトです。

ビーバーには「きまり」、カブには「さだめ」、ボーイ以上には「おきて」がありますよね、こんな時だからこそ今一度読み直してみてください。

疑問に思ったことの答えのヒントはそれらの中にあると思います。ただ誰かに言われたから「する(行う)」のではなく、その理由を考え動く「考動(こうどう)」ができるようになると、気持ち方や人への接し方、そしてなにより結果が変わります。我慢もできます。人は普段無意識に行動しているように思いますが、本来全ての行動には1つ1つ「すべき理由」があるのです。もし何か疑問に思ったり判断に迷った時は、自分の過去の経験だけではなく、是非「きまり・さだめ・おきて」に照らし「考動」してみてください。

皆さん同様私も3月上旬から毎日ステイホームで在宅勤務が続いており会社には行っていません。驚くことに1日の歩数が1,000歩に満たない日もあり、日々の運動不足が積み重なり最近の関心事No.1は「コロナ太り」という今日この頃ですが、感染拡大が一日も早く収

束に向かい以前のような日常生活とスカウト活動が戻ることを願っています。

そしてスカウト皆さんの笑顔に再会できる日を楽しみにしています。 弥栄！

※ビーバーやカブスカウトの皆さんにはちょっと難しかったかもしれませんが、保護者の方に読んでもらって下さいね。保護者の皆様も是非この機会にスカウトと一緒に「きまり・さだめ・おきて」に目を通していただくと幸いです。



# コロナ後のスカウト活動

## ビーバー隊隊長 草島隆行

ビーバースカウトのみんなへ。  
がっこうもやすみがつづいて、まいにちずっといえてちょっとあきてきたころかもしれません。ざんねんながらがっこうもボーイスカウトももうしばらくおやすみがつづきそうです。ほんとうだったら、あたらしいなかまをむかえて、かつどうをしているはずだけど、はじまりがすこしおけているだけで、かならずまたはじまるからもうすこしまってね。べんきょうもたいせつだけど、いえのなかやいえのまわりでできるうんどうをいしきてやらないと、からだがよくなっちゃうからきをつけてね。では、またあえるひをたのしみにしています。

それ以外の方々へ  
スカウト活動は言うに及ばず、緊急事態宣言の影響で私たちの生活も大きく変化を余儀なくされています。私のようなサラリーマンは今のところは仕事のやり方の問題を考えるだけと言えますが、自営業の方などは日々の売りにげに直結する話でもあり、私とは危機感が違うと思います。

コロナの影響について様々な観点から語られていますが、私は「分断」について少し述べてみようと思います。既にここ数年トランプ政権の誕生や、ヨーロッパでの極右勢力の躍進など、従来のグローバリゼーションに逆行する動きが出てきています。また、SNSの発達は自分にとって気持ちいい集団の中でのコミュニケーションを促進させますが、逆に言うと気持ちよくない人とのコミュニケーションを遮断する側面もあります。

このように実はコロナ以前から社会の分断は進んでいる中で、今回のコロナがさらにそれを加速させていると思います。報道でもありますが、軽井沢などに避難してくる東京民と地元民、しばらくは収入が変わらないため自粛の徹底を求めるサラリーマンや年金受給者とそうでない自営などの人たち、今回の発生源となったアジア系人種とそれ以外、など、今後生活が大変になればなるほど、自分とは違うグループを敵にする動きが加速します。確かに世の中の全てのものは「誰かのせい」かもしれませんが、犯人を捜して糾弾したところで根本的な解決にはなりません。中国やWHOを糾弾したところで明日の売りにげが元通りになるわけでもなく、昨今のパチンコ店たたきも個人的にはパチンコ店が片付いたら次のターゲットを探す、というのを繰り返し、ネタ切れになるとついにはとある属性を持つ個人の集団がターゲットになると思います。

こうして色々な意味での「分断」が放っておくと今後さらに加速していくわけですが、では私たちスカウト活動ができることは何でしょう？

例えば既に一部経済活動が再開している中国では、公共交通機関を避けみんな車で移動する動きがあります。しばらくはいわゆる3密を避ける動きが出るということです。スカウト活動の肝であるキャンプは、狭いテントに6人とかが泊まって3密もいいところです。

3密を今後も避け続ければ感染のリスクは減るかもしれませんが、今後もずっと避け続けるのでしょうか？「うちの家族（あるいは目に見える範囲の人たち）以外全員疑わしい」という考え方は社会全体の分断を加速していきます。最終的には子孫を残すこともできなくなり、種としての人類の終わりを迎えることとなります。

「生きる力」に新しい意味を加える時期が来たのではないのでしょうか？今まで以上に「他人を信じる力」ということになるかも知れません。もちろん無条件に信じるわけではなく、「信じられるに値する行動」というのも新たに必要なのかも知れません。まだ答えが見つからないこの問題に対して各自少しずつ考えてみる価値はあると思います。ひるがえってこうした観点で新しいスカウト活動を見つけ実行できれば、スカウト活動は社会にとってさらに有意義なものになると思います。今日明日の問題も重要ですが、世界でコロナ後の世界について早くも色々な議論が始まっている中、私たちスカウトに関係している人間もスカウト活動を通じて中長期的に何が出来るのか、改めて考える時期なのかも知れません。



# 二ヶ月間の休暇（あるいはもっと）

## ローバー隊隊長 渡口要

スカウトのみんな、元気ですか？ほとんどの学校はお休みでしょうから、毎日家に1人での時間がふえたかな？スカウト活動の方も、もう1ヶ月以上お休みになっているかと思います。

私といえば、最初のころはこれまで通り新幹線で仕事に行っていました。4月に入ってすぐにお休みになりました。買い物や洗濯や料理の合間に、本を読んだり映画を観たりして過ごしています。ちょっと風邪っぽくなって、なんとなく嫌～な気持ちになることもあります。

3才7ヶ月の私の息子も、入園した幼稚園がいきなりのお休みになって、4月からほとんど家で過ごしています。公園などに遊びに行くことはあるものの、なんだかんだストレスが溜まるだろうと心配でした。

しかしそんな心配をよそに、息子はたいへん快調です。1日中おかしな歌をうたい、楽しそうに踊り、笑いころげています。

にぎやかな息子を毎日見ている、みんなへのおせっかいを思いつきました。

世の中は大変なことになっていて、みんなの中にも困っているスカウトがいるかも知れません。でも明るく振る舞うのは「タダ」です。多少無理してでも陽気に振る舞ってみるのはどうでしょうか？

ビーバー隊のきまりの1つ目は「ビーバースカウトはげんきにあそびます」です。カブスカウトのモットーは「いつも元気」です。そしてボーイ隊以上のおきての5つ目は「スカウトは快活である」です。ボーイスカウトは「元気であること」をととても大切にします。

そんなこと言ったって、外にもろくに遊びに行けないし、友達ともなかなか会えないこんな状況で、無理に明るく振る舞ってもしようがないと思うかも知れません。今は世界が面白くないから、自分も面白く思えないのだ、と。

でも、こうは考えられないでしょうか？ **自分が面白くなれば、世界も面白く見えてくる。**つまり、ひっくり返すのです。

自分と世界をひっくり返すなんて、そんなのでダメされないぞと思うかも知れません。なんか似たようなこと、よく本に書いてあるぞと思うかも知れません。いちおう、このような考え方には「科学的に良いという理由」があります。説明はしませんが、単なる「気合い」ではありません。

しかしその「科学的な理由」を知らなかったとしても、きっと私はそれが「良い考え方」だと直感できたでしょう。なぜなら、ある意味このような状況になったおかげで、息子と長い時間過ごせるようになったからです。

息子を観察していると、自分が面白いから世界も面白い。世界が面白くなったから、自分ももっと面白くなる。そしたら世界はさらに面白く見えてくる…こんな感じで、**自分と世界の間で面白さがグルグル回転して、**

**どんどん面白く、楽しく、そして元気になっていく**ことが分かります。

いや実は、このことを私はすでに知っていました。本で読んだのではなく、誰かに聞いたわけでもなく、スカウト活動の中で学んでいました。それはキャンプファイヤーの経験です。

キャンプファイヤーを思い切り楽しむ一番良い方法は、何よりも自分が「思い切り楽しんでやろう！」と思うことです。たしかに、キャンプファイヤーの出し物が面白いことも大切ですし、入場のやり方や火の付け方を工夫して気分を盛り上げることも大切です。でも、**キャンプファイヤーを成功させる一番の近道は、自分の心の状態を「楽しむモード」に持っていくこと**なのです。

キャンプファイヤーが楽しいから自分が楽しいのではなく、自分が楽しもうと思っているからこそキャンプファイヤーが楽しくなる。そうひっくり返して考えた方が、絶対に「おトク」です。逆に言えば、「俺は絶対楽しまないぜ！」なんて思っていたら、どんな素晴らしい出し物があっても面白がれないでしょう。

このことは、一度でもキャンプファイヤーに参加したことがあるスカウトなら分かってくれるのではないのでしょうか。ボーイスカウトを作ったベーデン＝パウエルさんも、当然このことをよ～く分かっていたのです。

もちろん、みんな1人1人性格が違います。普段から騒がしいタイプもいれば、おとなしいタイプもいるでしょう。そういうみんなの個性は全て素晴らしい。だから、「多少無理してでも」とは言いましたが、**それぞれの性格ごとに「いつもよりちょっと多めに」自分から面白さを探しに**いって、この新型コロナウイルスが流行ってしまった世界をちょっとだけ楽しくしよう、ということです。

たとえばそれは、「毎日の朝のあいさつの声を少し大きくする」でもいいですし、「シャーロック・ホームズの本を全部読む」でもいいでしょう。もちろん、たとえばボーイ隊なら「この休みの間に、菊草とってやるぜ」でもいいと思いますし、「分厚い数学の本を1冊読破してやるぜ」なんていうベンチャー以上のスカウトもいるかも知れません。

そうやって、**せっかくこれまでと違う状況になったのだから、これまでと違った何かを始めてみる。すると思わぬ世界の面白さを新しく発見できる**かも知れないのです。

\*\*\*

私はいま36才で、妻と息子と3人でこの状況を迎え、ラッキーにもそれなりに楽しく日々を過ごせています。もし、ボーイスカウトのキャンプファイヤーの経験が無かったら、この生活をもっと苦しく感じていたかも

しれません。あるいは、めぐりめぐってこの3才7ヶ月の息子は生まれていなかったかもしれません。そんなことまで、この文章をここまで書いてきて、ぼんやり考えてしまいました。

世の中も人生も、「何をどうしたら、こういう良いことがある」ということをあらかじめ知ることはなかなか出来ません。ボーイスカウトの一番大切なモットーは「そなえよつねに」ですが、新型コロナウイルスに具体的な「そなえ」しておくのは、ほとんどの人にとって難しかったでしょう。

でも、**「楽しむモード」に入りやすくしておく「心のそなえ」だったら、いつでも誰でも出来ます**。それはさきほど言ったとおりキャンプファイヤーの経験の中で学んだスカウトもいるでしょうが、これからだっていくらでもトレーニングできるのです。

そしてさらに言えば、3才7ヶ月の小さな子どもこそが、そのような「楽しむモード」に入って色々な面白さを発見する達人かもしれません。だからこれは、「自分ももっと小さかったころの、好奇心いっぱいだった気持ちを取り戻そう」みたいな話かもしれません。

今の状況がいつまで続くか、先はなかなか見通せません。キャンプファイヤーのような「三密」の活動をまた出来るようになるのはいつか？ 今年の夏にはあっさり出来るようになるのか？ 来年は？ もしかしたらそれよりももっと後？ …誰にも分かりません。

それでも**いつかは必ず、みんなでキャンプファイヤーをやる日が来ます。それにむけて、「楽しむモード」に入る達人になれるよう、そして、世界の色々な面白さを発見する達人になれるよう、「心のそなえよつねに」のトレーニングをスカウトのみんながやってくれたら素晴らしい**と思っています。

その日が来たら、みんなが手に入れたその力を合わせて、思いきりキャンプファイヤーを盛り上げましょう。息子を連れて、私も参加したいと思っています。

## 蛇足

\*ボーイ隊以上のスカウト向け。もちろん、背伸びしたいビーバースカウトとカブスカウトも大歓迎。

新型コロナウイルスの影響で4月はほぼ活動が無く、さくらの発行が危機であるということで、久しぶりに長い原稿を書かせてもらった。ここ1年ほどさくらに書けていなかったのは、2019年前後から仕事がグッと忙しくなったことが原因である（実はもう1つ、iPadに装着して使っていたSmart Keyboardが壊れてしまって、新幹線通勤中に書けなくなってしまったことも大きい）。35歳前後というのは、プライベート・仕事ともに色々降りかかってくる年齢だ（村上春樹の「35歳問題」と言えば、ピンとくる人がいるかもしれない）。

今回のさくらには、おそらく僕の文章しか載らないということなので（\*追記: そう思っていたが、横山団委員長と草嶋BVS隊長の文章も載ることが直前に分かった。しかし、以下の考え方を変える必要はないだろう）、なるべく低年齢スカウトでも読めるように書いた。普段はビーバー隊からベンチャー隊までの文章が載っているので、それを「保険」にして、ローバー

隊のはむしろ「子ども向けにしない方が良い」という方針でやってきたけれども、今回はそうはいかない。依頼元のYさんにも、「くれぐれも感染症の専門家やあるいは経済学者が言いそうな、専門的で難しい内容は避けて下さい」と言われてしまった。

実は今回の依頼をされた直後、ビーバーからローバーまで5段階の原稿を用意して、徐々に難しくしていくようなことも考えた（ナイチンゲールの、戦場での看護婦としての姿と、大好きな数学を実践に応用した統計学者としての姿と、50年間ベッドの上で大量の文章を書いた物書きとしての姿を、このコロナ禍に絡めるというネタで）。そう考えたのは、なんとか専門知を文章に入れ込みつつ、さくらを成立させられないかと考えたからだ。Yさんの心配はもっともだ。けれども僕は「読み手の読解力に合わせて、過剰にサービスする文章だらけになっている」ことをあまり良く思っていない。もちろん子どもにとってどのような文章が相応しいのか、それは当然考えるべきだし、今回の原稿もそう思って真摯に書いた。B-Pも、そのような観点でレベル毎に文章を書き分けることができる名文家だった。でも、例えば小学3年生が自分には難しすぎる文章に触れて、内容は分からないなりに影響を受けることはある。それに、そういう難解な文章を論理だけを頼りに1行1行追うことに喜びを感じる奇矯な奴だっているかもしれない。ただ、2日しか書く時間がなかったので、そんな複雑なことは出来なかった。

その代わりと言ってはなんだけれども、本文中で書いた「これまでと違った何かを始めてみる」ときのお勧めとして、特にボーイ隊以上のスカウトに（そしてもちろん背伸びしたいビーバー・カブのスカウトにも）「文章を書くことに徹底的に向き合う」ことを提案したい。良い文章を書く方法を教える本や情報は沢山ある（例えば木下是雄『理科系の作文技術』は定番。他に今だと、Google検索で「千葉雅也 文章」でヒットする情報なり本なりを勧める。ただしこれらはボーイ隊のスカウトでも難しいと思うので、その場合にはまずは自分の力に見合った本を探すことが必要）。それらを読むのもいいし、あるいは両親が仕事などで作成している文章がいかにして「大人の仕事の世界で通用する文章」になっているか、そして逆にどういう文章だと通用しないか、真剣に分析して考えてみるのも良いと思う。

僕も実践している方法を1つだけ言えば、「とにかく最初（第1稿）は、文法が変でも句読点がおかしくてもいいから、とにかく思いつくままに素早く粗く書き殴る（内容が稚拙で量が少なくてもいい）。そしてその後の推敲の時間をできるだけ長くとる」のが有効だ。極端に言えば、最初に内容をざっと書くことよりも、その後の推敲の方が文章を書く上で本質的な作業だ、と思うぐらいで丁度いいかもしれない。そしてこれが大事なだけれども、「推敲する時に、『てにをはの選択』や『語順の入れ替え』や『句読点の調整』をやればやるほど文章がどんどん良くなっていくのを、ニヤニヤしながら楽しむ』ようになれたらしめたもの。読書感想文が嫌で嫌でしょうがないスカウトは「そんなことあるわけない」と思うかもしれないが、この推敲の面白さというのは確かにあって、それが理解できたら書くことが楽しくなる上に今後ずっと強力な武器になる。

文章を手本にして勉強するなら絶対に名文を参考にした方が良いのだが、せっかく読んでくれているので、

今回の僕の駄文から2つ推敲の例を出そう。1つ目は本文の真ん中あたり、「キャンプファイヤーが楽しいから自分が楽しいのではなく、自分が楽しもうと思っているからこそキャンプファイヤーが楽しくなる」という文章。僕は第1稿では、最終稿と同じくこの文章の最後をキャンプファイヤー「が」楽しくなる、としていた。しかし途中で一旦キャンプファイヤー「は」に直している。結局は元に戻したので、「が」→「は」→「が」と変遷したことになる。その迷いと最終的な選択の理由が分かるだろうか？ 各々考えてほしい（「が」と「は」は、助詞の選択の中でも最も難しい）。もう1つは本文の最後、「息子を連れて、私も参加したいと思っています」だ。この「息子を連れて」の部分を、「？才の息子を連れて」あるいは「X才の息子を連れて」にしようかどうか、10分ほど楽しく悩んだ。1つ目の例と違って、こちらの選択は文法的にはどれでも構わない。気にしているのは「文学的效果」だ。最終的には「？才」や「X才」は説明的すぎてダサいと判断した（こーやってネタバレするのが最も文学的效果を削ぐのだけれども、今回は取えてやっている）。以上、拙い例だったかもしれないが、「そんな細かいところで悩んで、しかもそれを楽しんでいるのか」と少しでも驚いて貰えればOKだ。

最後に、なぜこんなに文章を書くことや、専門知の入った文章を頑張って読むことに僕が熱い想いを持っているのかを説明する。それは、とても凡庸な言い方になるが、簡単に言えば「読解力の低下への危機感」からだ。

ここ10年〜20年、「easy革命」とでも呼ぶべき事態が進行している。会社でのプレゼンでも、ニュース記事でも、とにかく可読性を最優先にして、分かりやすく、短く、ためになる情報が量産されている。その革命によるeasy化技術の発展は凄いもので、僕が好きな哲学の古典なんかも「要はこういうことだよ」という形で続々とスマートな解説が与えられている。誤解してほしくはないのだけれども、このeasy革命は基本的にとても良いことだと僕も思っている。当たり前だ。簡単かつ短時間で多くの知識が手に入るのだから、人はさらにその先を自分の頭で考える余裕を持てる。いいことに決まっている。

ただ、それだけではこぼれ落ちるものがある。別に僕に限らず、同じようなことを言っている人は多い。それは、プレゼンだったら「理解すること」ではなく「理解した気分を味わえること」が優先される弊害を生み、文章だったら「明快なメッセージの連鎖としてだけで読まれる」ようになって「文脈や行間が読み取られない」という弊害を生む。でも僕が一番気にしているのは、「専門的な文章や言葉」が全て「難しい」という箱の中に一緒にたに放り込まれて、それらの間の良し悪しに対する判断能力が底無しに低下してしまう危険性だ。「良いか悪いか」の判断が「簡単か難しいか」にすり替わって、「専門的で分かり易いけど間違っている情報」が、「専門的で分かり難いけど正しい情報」を駆逐してしまうことを恐れている。あるいは、専門家の意見が対立している時、「世の中の雰囲気がかっち側だから」とか、「こっちの方が有名大学の教授だから」とか、逆に「有名大学の教授で政権に近いいわゆる御用学者だから」とかいった内容を無視した判断基準で、何を信じ何を信じないかを判断するようになってしまうことを危惧する。両論併記すればいいというわけでは無いのだ。もちろん、現代の専門知はあま

りに高度化してしまったので、多くの人はその正否を直接的に判定することなど出来ない。だから専門家と市民を中継する役割が非常に重要であって、それが上手いかないと民主主義は機能しない。それはそうだけれども、その前提にはやはり、古臭い啓蒙主義と言われようが「市民のリテラシーの底上げ」が必須なのだ。それがeasy革命によって底抜けしてしまうのは非常にまずい。そう思って、ローバー隊では文章添削を活動の1つとしてやってきたのだ。

もうすでにお分かりのように、この懸念はまさに今、新型コロナウイルスの引き起こした状況によって現実になった。本来なら2011年の原発事故の時の「失敗の経験」をもっと活かすべきだったけれども、あまりそうっていない。実は、以前からさくらに書いている長い文章は、あの原発事故後の状況に対する問題意識に突き動かされている。力量不足かもしれないが、科学的リテラシーも含め、要は「読み書き算盤」をなんとかしたいのだ。そういうわけで、今のコロナ禍の中で「文章を書くことに徹底的に向き合う」のを提案することには、僕の中で強い必然性がある。

書き始めたら、とんでもない蛇足になってしまった。でもきつと、少なくとも「熱量」だけは伝わったと思う。やはりコロナ禍で強いストレスを感じているのかもしれない。あした息子に癒されよう。





3月、4月ともに予定されていた会議は中止となりました。



## 育成会より

今年の育成会総会は新型コロナの影響を受けて、非集合形式での開催を予定します。

5/11月曜日に基本メールで、総会資料を送付いたします。

添付の「案内」をご確認いただき、リモート総会へのご協力をどうぞよろしくお願いいたします。



創始者  
ロバート・ベーデン-パウエル卿  
(1857年～1941年)